

気になる～♡

今月の利用者紹介

つくばね会で日々頑張っている利用者の皆さんをご紹介します！！

(所属/①名前 ②好きな推し(有名人等)はいますか? ③100万円あったらどうしますか?)



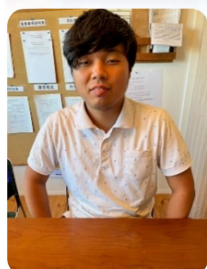
けやき社会センター

- ①K.Sさん
- ②MAYA (NiziU)
- ③世界一周旅行



けやき社会センター

- ①吾孫子 壮身さん
- ②石原さとみ
- ③沖縄&北海道旅行



はるか移行

- ①広瀬 渡さん
- ②博衣こより(Vチューバー)
- ③ピクミン3のゲームを買う



はるかB型

- ①N.Tさん
- ②キャンティーズの蘭ちゃん
- ③大型テレビを買う



おおばん

- ①久保 友和さん
- ②車 フォードが好き
- ③老後の為に貯金



おおばん

- ①榎本 智子さん
- ②おおばんの職員
- ③おおばんの職員と旅行



ふれんず

- ①山本 耀平さん
- ②ちいかわ
- ③パソコンとちいかわグッズをみたい



ふれんず

- ①若井 豪太郎さん
- ②にゃんこ大戦争
- ③Youtubeの企画・撮影を撮ってみたい

編集後記

早いもので今年も残りあと2ヶ月となりました。歳を重ねると月日の流れは尋常ではないほど早く感じてしまいますね。子どもの成長は嬉しさもあり寂しさもあり…。

自分自身は年を取るのではなく、歳を重ねる=経験を積み重ねると解釈し、頭も身体も心も常にアップデート! 毎日が最新版 YOSHIDA42で舞っていきます!!

けやき社会センター 吉田 寛貴(42歳)

～ そよ風のように街に出よう～

S S T L

つくばね通信



社会福祉法人つくばね会

代表 千葉県我孫子市都部新田37-2

TEL 04-7187-1944

FAX 04-7187-1947

HP <http://tukubanekai.sakura.ne.jp/>

編集・発行：けやき社会センター・はるか
おおばん・ふれんず・楓・サポートセンターけやき

2024年10月24日発行（毎月12回2・4・6・8の日）
1994年8月24日 第三種郵便物承認

通巻 第5549号

発行人 埼玉県障害者団体定期刊行物協会
川口市芝新町15の9 頒価 50円
郵便振替 001000-811223

私は月に2回、松戸市の健康福祉会館ふれあい22で行われる「スペシャルオリンピックス卓球」の練習に通う方のガイドヘルパーをしています。

ガイド当日は電車とバスを乗り継ぎ、会館に着くと体温測定及び手の消毒を行います。チームメイトやそのファミリーと協力して、卓球台・ネット・椅子の設置準備をします。次にラジオ体操、ストレッチ、ランニングに始まって、ラケットを持って素振りや突つき、サーブレシーブまで基礎練習をみっちり2時間行います。私はファミリーに混じってボール拾いです(汗)。最後に5グループ(1グループ4名)に分かれ練習試合が始まります。見守り支援がいつのまにか熱が入り、拳を振り上げて観客になって応援です!「頑張れ〜!」

この利用者は毎回試合後にカバンからノートを取り出し、コーチのアドバイスと試合の結果をノートに書きます。「息を吐く 重心は前 3勝1負」そして私に聞きます。「勝ちたいです」「強くなりたいです」「どうすればいいですか」と。その目は真剣で私は圧倒されます。目の前には切磋琢磨し合っているチームメイトと、素晴らしいコーチがいて、皆が支え合いながら成長しています。目標に向かって精一杯努力している方々を見ていると、私も胸が熱くなります。貴方たちの姿に、中学時代に卓球部で汗を流した自分と当時の仲間たちとの思い出を、重ね合わせているのかもしれない。

ガイドヘルパーは、利用者に安心感を与える存在であるべきだと思っています。しかし一方で、貴方の競技に取り組む姿や相手に対して偉ぶらない態度を見ていると、誠実さや謙虚さを教えられます。それはきっと私も昔は持っていた物で、日々の生活の中で忘れがちになっている物なのかもしれません。今後も必要なサポートを提供し、利用者に合った力を出すことのできる環境を整えていこうと思います。来月もまた私を連れて行ってくださいね、お願いしますね!

(サポートセンターけやき 加賀 邦彦)

スペシャルオリンピックスとは
(英語: Special Olympics、略称: SO) とは、知的障害のある人たちに様々なスポーツトレーニングとその成果の発表の場である競技会を、年間を通じ提供している国際的なスポーツ組織です。
「引用:スペシャルオリンピックス日本 ホームページ」

「就業支援基礎研修に参加しました」

就業支援基礎研修に参加し、イオンファンタジー人事グループの岡氏より、同社の障害者雇用に関するお話を伺いました。イオンファンタジーでは、2014年から障害者雇用を開始し、2024年現在、法定雇用率を上回る3.82%の雇用率（民間企業では令和6年4月時点で2.5%が法定雇用率）を達成しています。特に、精神障害者の方の雇用が全体の約6割を占めるなど、多様な障害を持つ143名が活躍されています。岡氏のお話で特に印象に残ったのは、配慮についての考え方です。同社では、「配慮」は会社だけでなく、「本人自身の努力」があつてこそ成り立つものとし、支援慣れを防ぐために、本人との間で努力目標を設定し、自分らしく長期的に働ける環境づくりに取り組まれているとのことでした。

私自身、定着支援の現場で同様の課題を感じていたため、今回の研修は非常に有意義でした。この研修で得られた事を活かし、一人ひとりの個性と能力を最大限に引き出すような支援を目指していきたくと考えています。

（はるか 宮澤 大地）

福祉を目指したきっかけ

私は母親が有料老人ホームで看護師をしていたこともあり、小さい頃から私自身も母親の職場で見学や実習体験などを行い、高齢の方との関わりを多く経験していました。その中でも小さい頃、母親の勤務が終わるまで暇をしていた私に認知症の女性の方が笑顔で話し掛けてくれ、一緒に遊んでくれたことが今でも強く印象に残っており、今振り返れば福祉業界に興味を持った最初のきっかけとなったのかもしれない。

月日が経ち大学の進路を決める際、元々子どもが好きな事もあり子どもと関わる仕事に就きたいと思っていたので児童専攻かな、と漠然とした考えを持っていましたが、心理学にも興味があったので、児童福祉も福祉心理学も学ぶことができる社会福祉学科を専攻しました。しかし、大学三年になっても将来就きたいと思える職業が見つかることができず、焦りから実習先もとりあえず幅広い事業が見られるのではないか、という気持ちで社会福祉協議会に実習に行きました。この実習がもう一つの福祉を目指すきっかけとなりました。

実習では生活支援として高齢者や子どもが孤立しないような居場所づくりや定期的なイベントに参加をしたり、地域支援では相談窓口にて障害を持つ家族についての相談を聞いた際に、障害に対しても意識を持つようになりました。

中でも実習後半で福祉サービス利用援助に同行した際に自宅がゴミ屋敷状態の方、家族に縁を切れ孤独状態の軽度の障害を持つ方など、実際にその方の資料や自宅訪問で見た光景は大学の講義で文字だけで学んでいた時の想像をはるかに超えた衝撃を受けました。このような実習での経験を通して、元々視野に入れていた子どものみならず、障害のある方のサポート役になりたいと思い、子どもから大人まで、様々な事業を行っているつくばね会に入職させていただきました。

今後とも利用者の方の気持ちに寄り添い、成長をお手伝いする支援を目指していきます。

（ふれんず 白井 花帆）

子ども食堂でお弁当作りの様子紹介

2019年にコロナが流行し、それ以降おおばんで各家庭に配布するお弁当を100食前後作らせてもらうことになりました。毎月第4金曜日は午前中にお客様のお弁当、午後は子ども食堂のお弁当作りと忙しい1日ですが、皆さん慣れているのでテキパキと動いてくれます。

毎回調理にかかわる職員同士で、子供達が食べやすいお弁当を考えるのも難しく、お弁当の色合いをどうするか？野菜は何をいれるか？季節に合わせたメニューにするのはどうか？など、毎月作っているお弁当とできるだけ被らないように話し合っています。その姿を見ているからか、利用者から「これなら子供も食べれるね」「今日のお弁当は豪華だからよろこんでくれるかな？」とお弁当を作りながら聞きに来る事がありました。子供が誤嚥してしまうニュースを見た後は「トマト切らなくて大丈夫？喉つまらないかな？」「この野菜の切り方大きいかな？もっと細かくしないと危ないかな？」などお弁当の盛り付けの際に質問してくる方もいました。食数も多いので作り終わった後の達成感は強いようで、「おわった！頑張った！」と声を掛け合う場面も見られました。

こども食堂でお弁当を配布している際に保護者から「このお弁当は美味しいから安心して子供に食べさせられる。」「毎回子供と美味しくいただいています。」など感謝の言葉をいただきます。

今後とも子供だけでなく、保護者が安心して子供と食べられるようなお弁当を利用者と一緒に考え作っていきこうと思います。

（おおばん 植木 しほ）

ふれんず活動様子

まだまだ夏の残暑を感じますが、早かったような長かったような夏休みが終わりを告げました。子ども達の中では「もう夏休みが終わっちゃう」と寂しそうなお子も居れば、「学校がもうすぐ始まるね」と新学期を楽しみにしている子も見られました。

今年はイベント盛り沢山の夏休みでした。7月は印西市にあるジョイフル本田に外出に行き、事前に食べたい物を調べて決めていた為スムーズに購入し食事を楽しむ姿や、ふれんずでの外出が初参加の方も居りワクワクした姿も見られました。8月は法人内（おおばん）のお祭りに参加したり、ふれんず縁日を開催しました。おおばん夏祭りではかき氷を食べたりゲームに参加し景品をゲットすることができ笑顔が見られ、ふれんず縁日では実際の屋台等の買い物を想定し、何を食べるかを選びチケットと商品交換までの流れを各自で体験して貰いました。お祭りの雰囲気もあったからか、美味しそうに頬張る様子が見られそれぞれのお腹がパンパンになっていました。

メインである外活動では、今年も猛暑日が続いていたので公園で遊ぶ時間を普段より短く定め、こまめな水分補給を徹底しました。また水遊びが好きな子が多いので水鉄砲や親水施設での水遊びを取り入れました。猛暑が続く中でも子ども達は一人一つ手には水鉄砲を持ち職員を追いかける子や利用者同士でかけ合う様子や、親水施設では体まで水に浸かり気持ちよさそうな様子が見られ、子どもも職員もびしょ濡れになりながら遊びを楽しめました。

夏の暑さにも負けないパワーを子ども達から貰い、職員も負けてられない夏休みだったと思います。ふれんずでの夏休みが子ども達の思い出の一つになればと思います！

（ふれんず 松崎 李星）



こんにちは！こほくこども食堂です

こども食堂では8月にミニ夏祭りを開催いたしました。また今回は久しぶりに食堂内で食事ができるようにしました。コロナの感染以来、ずっと持ち帰りのみにしてましたので、皆さんが美味しいと言いながら食事を楽しまれている様子を見られて嬉しかったです。夏祭り、ということで、メニューは焼きそば、唐揚げ、フランクフルト、かき氷を準備させていただきました。持ち帰ることもできましたが、中で食べていかれるご家族も多くいらっしゃいました。奥の部屋でヨーヨー釣りや、ストラックアウト、輪投げ、皿回し、駄菓子のクジなども用意。特に皿回しが人気です。今回もボランティアさんが3名参加してくれました。3年連続来てくれている中学生と、小学生の兄弟が来てくれました。感謝ですね。

食堂を開催していて、いつも感じていることですが、子どもたちが楽しそうに遊んでいて、それを大人がにこやかに見ている様子が素敵です。

これからも子どもたちに喜んでもらえるような食堂を続けて

またご寄付いただきました皆様、いつもありがとうございます。ただ、食材が足りず、十分な量を参加してくれているご家庭にお渡しできない月もあります。少しでも構いませんので、ご寄付いただける方がいましたら、けやき社会センターまでお願いいたします。

★こほくこども食堂 毎月第4金曜日 17時半～18時半
けやき社会センター(04-7187-1944)



いきたいです。



(サポートセンターけやき 樋口 恵理子)

旧優生保護法

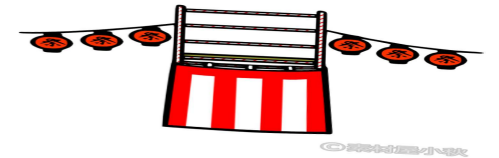
1948年に施行された法律で、その目的(1条)に、この法律は、優生上の見地から不良な子孫の出生を防止するとともに、母性の生命健康を保護することを目的とする。とあります。また、「医師の認定による優生手術」の第1項に、「本人の同意並びに配偶者があるときはその同意を得て、…」とありながら「但し、未成年・精神障害者・知的障害者についてはこの限りではない」といった内容になります。つまり、障害を持った人たちは本人の同意なく優生手術(不妊手術)を法的に認めるものであり、その存在をも否定するような内容です。

この法律は1996年に母体保護法に改正されるまで48年間にわたり続いていました。2018年、知的障害を理由に不妊手術を強制された女性が全国初の国に対して賠償を求めて提訴、この事は大きなニュースとなり広く知られるようになりました。この法律の存在を知った当時、つい最近まであったのだ、と驚いたのを覚えています。

戦後の混乱期のなかで日本を再興することへの考えは理解できるが、この方法はとても恐ろしい、当時、障害や疾患がそのまま子へと遺伝すると考えられていたことも大きな要因ではあったのですが、国としてこれを正当化した事は障害者差別への助長に繋がったのだと考えられます。被害に遭われた方々の話を聞きくと言葉を失います。

7月30日最高裁で旧優生保護法は憲法違反と判決がでました、この判決をうけ国が補償などを含め被害に遭われた方々へどう対応していくのか、そして「私たちのことを私たち抜きに決めないで」というスローガンの障害者権利条約の批准国となった日本がどうなっていくのかしっかりと確認しながら、私たちも出来ることに取り組んでいきたいと思ひます。(グループホーム管理者 廣瀬 晋)

「来年はやぐらを囲んで・・・」



7月下旬、地域が主催の夏祭りがありました。櫓(やぐら)を立てての盆踊りも開催される夜祭りで、去年に引き続きパン販売で参加しました。一緒に販売に参加した利用者さんは、暑い中「いらっしやいませ、いかがですか」と声を出し販売。客足がピークに来た頃「もうすぐ盆踊りが始まるよ」と地域の方が教えて下さいました。利用者さんは踊りや歌が好きで、盆踊りの情報を聞くと「踊りに行きたい」との希望。行かせてあげたい思いもよぎりましたが、「今日は販売活動に来たので販売を頑張りましょう」と伝え「ここで踊ろう」と提案。販売しているテントから櫓までは少し遠く、踊っている人たちは全く見えない状況の中、利用者さんは櫓のほうに体を向け、流れてくるアラレちゃん音頭、ドラえもん音頭を歌いながら踊っていました。どこかで習ったのかと思うくらいに上手に踊っていて、盆踊りを楽しんでいる姿に、心が和みました。翌朝、利用者さんは「昨日は販売お疲れ様でした、盆踊り楽しかったです」と挨拶をして下さいました。テントの中での盆踊りでしたが、楽しかったと聞き、少しほっとした自分がいました。

利用者さんの心に夏の思い出となって残ってくれたら嬉しいなあ。。。

『またこのような機会があったら、今度はけやきの利用者の皆さんとも一緒に来てみたい、そして皆で櫓を囲んで踊りたい』と思ったので、皆で夜祭りに来る活動も、今後検討していきたいと思ひます。

(けやき社会センター 檜田 道子)



～農福連携訓練始まりました～

現在、はるかでは毎週『農作業訓練』を実施しております。農作業訓練は「農業の仕事に携わりたい。」と考えている方に実践的な訓練の提供や、体力強化を目的として実施しております。湖北特別支援学校や流山高等学園でも、農業に関する学びの場がある事もあり、就職活動に関連付ける事が出来ていると思っております。

この毎週行っている農作業訓練とは別に、昨年度も取り組んでおりました『※農福連携訓練』が今年度も7月より始まりました。(※農福連携とは?・・・障害のある方が農業分野での活躍を通じ、自信や生きがいをもって社会参画を実現していく取り組みであり、また農業分野としても担い手不足や高齢化が進む現状において、新たな働き手の確保につながる、相乗効果が期待できる連携の事。)

この訓練は、JA千葉東葛様と連携し、一般農家の方が所有する畑に伺い、農業のお手伝いをする訓練になります。今回の作業内容はねぎ畑の畝間の除草作業です。熱中症対策を講じて臨んではいますが、炎天下の元での作業は私も堪えてしまいます。しかしながら、利用者の皆様は「効率を考えてチームで分かれて作業しましょう。」や「私は〇〇を行いますから、Aさんは××をお願いします。」と訓練に対するモチベーションの高さが見受けられます。皆様のこのような姿勢を農家の方も認めて下さり「とても助かっています。」とお褒めの言葉を頂戴しました。引き続き、暑さに負けず、地域との関わり合いや皆様の意欲を大事にしながらかつ実のある訓練提供に努めて参ります。(はるか 林 裕記)



福祉に正解はない 同世代の福祉職員から見る津久井やまゆり園事件

「意思疎通が取れない人間を安楽死させるべきだと考えております。」

2016年7月、19名もの尊い命が失われた津久井やまゆり園事件。犯人は当時26歳の同施設元職員であった植松聖死刑囚。施設職員として障害者と関わっていた犯人がなぜこのような思想に至ったか、現在28歳で福祉職に就く私の目線で考えていきたい。

彼は意思疎通が取れない人間を「心失者」と呼び、生きていても仕方がないと主張する。なぜこのような思想に至ったのか、彼がマスコミ宛に送った手紙から考えてみる。

「心失者を養うことは、莫大なお金と時間が奪われます。（中略）私は支援をする中で嫌な思いをしたことはありますが、それが仕事でしたので大した負担ではございません。しかし3年間勤務することで、彼らが不幸の元である確信を持つことができました。」

私は彼が「不幸」という言葉を用いていることから、彼は人の幸せを追求しようとしたが、彼のいう「心失者」には幸せという感情がない（分からない）から「生きている価値がない」と身勝手な正解を導き出してしまい、優生思想とも言われるような思想に至ってしまったのではないかと分析する。分からないことを必要以上に恐れ、分からないものは失くしてしまえと強迫観念に苛まれてしまったのではないかと分析する。

私たち若い世代は、インターネットで検索すればすぐに答えが返ってくる世の中で成長してきたこともあり、分からないことをすぐに検索する行為が当たり前になっている。彼も事件前からインターネットで自身の考えについて発信を行っており、事件後も自撮り写真とともに発信を続けていた。

自身も障害を抱える娘をもつ和光大学名誉教授で思想評論家の最首 悟氏は、事件についてのインタビュー内で、近年は合理と即決主義が優先され、「わからなさ」がなおざりにされていると分析する。

最首氏は月刊『創』のインタビュー内で、

「若い人たちは、わかる努力をすれば、わからないことが減るかのような幻想のもとに教育されてきた。」と述べる。植松死刑囚は分からないことを極端に恐れ、それを埋めるためにインターネットで断片的な情報を集め、危険な思想に染まってしまったのではないかと最首氏は分析する。

最首氏は「わからなさ」について「全体という嵩（かさ）がわからなければ、どれくらいわかったという比率などは言えないわけです。」と述べている。

「福祉に正解はない」 つくばね会の諸先輩方から頂いた言葉であるが、簡単に正解にたどり着ける世の中に育った私たちだからこそ、じっくり考え、行動し、話し合い、一緒に正解を導き出す経験が必要なのではないか。

それでもやはり「福祉に正解はない」どれだけ手を尽くしたとしても、その人のことを完全に理解することはできない。それでもその正解と一緒に模索するのが福祉、すなわち「共に生きる」ということではないかと私は考える。

（ふれんず 中林 佑樹）

はるか夏祭り～縁日～

暑さも真っ盛りな8月24日土曜日、縁日と表し、はるかで夏祭りを開催しました。今年はボリュームアップし、B型、移行合わせて利用者14名、職員4名の賑やかなお祭りとなりました。

お面づくりでは紙皿をベースに色々な装飾を施し、思い思いにオリジナリティ溢れるお面が沢山出来ました。例えば毛糸を使って動物のお面を作る人や、画用紙や色マジックを駆使して人気のキャラクターを作る人など、多数の力作が生まれました。他にも水鉄砲を使った射的、手作りすいか割りなど夏を代表する催しを実施、食べ物もたこ焼きやフランクフルト、かき氷やベビーカステラなどの屋台ならではのものを用意致しました。スタンプカードとラムネを片手に各所を回る利用者さんの顔には笑顔が溢れます。またクイズ大会や宝探しなどのサプライズイベントも大盛り上がり、大勢の名探偵が謎を解き明かす為にはるか中を奔走しました。

普段は暑い日差しの下、精一杯作業に取り組まれている利用者の方々。今後もイベントを通し皆で夏を楽しめる、毎年の風物詩になっていけるといいなと思います。

（はるか 植原 大輔）



一日めいっぱい楽しんだ土曜日活動

今回の土曜日活動は利根町花火大会に行く予定でしたが、台風の影響で延期という発表が出され、残念ながら活動内容を変更しました。当日は異常な暑さとなる予報が出ていたので、熱中症に配慮し、屋内で過ごせるつくばエキスポセンターに行きました。

駐車場から入口まで少し歩いただけでも汗が流れるぐらいの暑さで、皆さんと「暑いね～」と言いながら歩き、受付を済ませ館内へ入場しました。館内はとても涼しく快適に過ごせホッと、元気を取り戻しました。

一階の科学体験コーナーには、お盆の夏休み時期もあって、小さなお子さんを連れだご家族でいっぱい。特に人気のしゃぼん玉の中に入る体験コーナーは大行列が出来ており、皆さんもその列に並び、しゃぼん玉に入り記念撮影をしました。また他の体験コーナーも一通り回り、カメラ越しに素敵な笑顔を見せてくれました。



最後にメインのプラネタリウムを鑑賞へ向かいました。40分間の上映時間も、一面の綺麗な夜空を見ているうちにあっという間に終了。全体が明るくなると「〇〇さん寝てたよ」や「僕も（私も）寝ちゃったあ…」といった声が聞こえてきたりしましたが、暗くなった空間を思い思いに満喫したようです。

その後は、布佐の「中国料理 紅龍閣」の一室を貸し切り、本格中華でお腹いっぱいになりました。おおばんに戻り、駐車場でかき氷を食べながら手持ち花火をして時間が許す限り楽しみ、一日を使ってめいっぱい楽しむ土曜日活動となりました。

（おおばん 吉田 将人）